

---

# # 木山先生

薬剤師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

# 木山先生

### 【Nコード】

N4179K

### 【作者名】

薬剤師

### 【あらすじ】

これは木山先生のお話。超電磁砲最終回をベースに作られた、ハッピーエンドな二番煎じです。木山先生が好きな人・超電磁砲が好きな人は、是非お立ち寄り下さい。

## (前書き)

### 注意事項

- ・本家と違うところがいくつかあり、完全に同じという訳ではありません。ですがお話を覆すようなことではないので、温かく見守って下さい。
- ・あと下手です。

悲しかった。悔しかった。辛かった。情けなかった。

可愛い生徒達を失ったことが悲しかった。

権力を打ち負かせないことが悔しかった。

努力が報われないことが辛かった。

なによりも、何もできない自分が情けなかった。

『私達は学園都市に育ててもらってるから、この街の役に立てるようになりたいなーって』

自分の境遇を嘆くことなく、役に立ちたいと健気に言う子供達。

嫌いなわけじゃないじゃないか。嫌いだなんて、思うわけない。

悪戯するところも、失礼なところも、すぐ泣くところも、馴れ馴れしいところも……全部大好きだったよ。

『木山君、よくやってくれた。彼らには気の毒だが、科学の発展には付きものだよ』

大好きだった子供達。

大切な私の生徒。

なのに、私はあの子達に何をした？

チャイルドエラーだから……帰る場所も頼る親もないのだから……

……。そんな理由で、簡単に科学者はあの子達を捨てた。あいつらは

命よりも実験を優先する。そんなこと、何となく予想はついていたじゃないか。

私が全力で止めていれば、クビを覚悟で反対すれば  
それでもやはり、実験は行われたんだろうな。

私は無力だ。なんの力も持っていない。生徒の一人も守れないなんて。

『木山先生のこと、信じてるもん』

……私を信頼して実験を承けてくれたのに。

《その信頼に、私は応えねばならない》

《私はあの子達の先生なのだから》

使用許可を申請する。

……ダメだった。

使用許可を申請する。

……ダメだった。

使用許可を申請する。

……ダメだった。

使用許可を

23回だ。

ツリーダイアグラムの使用許可を23回申請した。だが全て例外なく却下されたよ。

それでも諦めない。無駄だと言われ、相手にされなくとも屈しない。別の方法を考えるまでだ。

なんとしても助ける。そのためならあがき続ける。私はそう誓った

んだ。

最近まともに寝ていない。目の下にはくまができたし、髪もぼさぼさにのびてきたな。だが、己の見た目にかまける暇などないんだよ。ついにプログラムが完成したんだ。これを使えば、あの子達を助けられる。目覚めさせてやることができる。無力な私にその力をくれる“音”。

首謀者が分かるまでには必要以上の人間がこれを使っているだろう。それで充分だ。

それに、私は捕まる気などない。

あの子達を救うためだったら、私はなんだってする。

あの子達を救えるのは私だけなのだから。私にしか、できないのだから。

この街の全てを敵に回しても、止めるわけにはいかないんだ……！！

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「……ん、ああ、もう朝か……?……」

木山春生は目覚めた。カーテン越しの窓からは、薄く光りが差し込

んでいる。

木山は怪我のため、病院で療養中だ。患者へ負荷をかけないよう作られた気持ち良いベットに寝ていた。

「……変な、夢を見たな。あの頃はどうかしていたと、今さらながら痛感する」

木山はベットから出て、シャツとカーテンを開ける。すると部屋の中は大分明るくなった。

「だがその事について反省も後悔もしていない」

そう言うと、不敵に微笑んだ。その顔にはもうくまはない。今はゆっくり睡眠をとれるのだから。

「私は、私の正義を貫いただけだ」

なんとなく振り向いた木山は、ベットの横を見る。そこにはおいしそうな果物と、写真があつた。どちらも昨日、御坂達を持ってきてくれたものだ。

テレスティーナを倒した後、御坂達と子供達と一緒に撮った写真だった。全員傷だらけだったり、まともに立てなかったりと散々だが、いい顔をしていた。

「子供達を助けたのは私じゃなく、彼女達なんだろう」

超電磁砲、御坂は戦闘において大活躍した。

白井もまた同じく、その力を存分に発揮した。

初春はパソコン操作やプログラム解除など、いろいろなことをした。佐天はレベル0ながらも、おおいに奮闘した。

「まったく……あんな子達に会えるなんて、この学園都市は退屈しないな」

木山は同じく持つてきてもらった自分のアルバムに、その写真を入れる。

教師をしていた頃に撮ったクラス写真の隣に入れた。

「あの子達は、時が経つたのに全然変わっていない……」

木山はベットに戻ると、そのままアルバムを見始めた。

どれくらい経つただろうか。ふと外から大きな音がした。木山はアルバムから顔を上げ、窓の外を見る。

外には学園都市の飛行船があった。大きな画面には広報と書いてあり、そこには“子供達”が映っている。みなまだ完全に回復していないため車椅子に座っているが、あのクラス写真のように綺麗に列んでいた。

「一体、何を」

木山は驚いて目を離さずにいた。するとまた大きな音がした。いや、声

『『木山せんせい、お誕生日おめでとう！！』』

「……………！！」



木山は言葉を失った。

あの子達が覚えていてくれたことに、激しく感動したのだ。自分の誕生日を忘れずにいてくれたことが、とてつもなく嬉しかったのだ。そしてずっとカプセルの中にいたのに、そんなことを覚えているなんて、信じられなかったのだ。

今までは写真の中でしか見られなかった、子供達の元気な笑顔が、木山には眩しかった。

なによりも、また会おうと思えば会える、その現実を実感したようで、言葉にできない程幸せだった。

「ああ……ありがとう……」

涙が頬を伝う。だがその涙は悲しみや絶望から流した涙ではなかった。温かすぎるくらい優しい気持ちから、自然と零れた涙だった。みんな元気になったらパーティーをしよう、と木山は思った。昔あの子達がクラスで自分にしてくれた誕生日パーティーのように、綺麗に飾り付けた部屋で行おう、と。

「本当に、ありがとう……」

木山は涙を零しながら、優しく微笑んだ。

(後書き)

最後まで見てくれてありがとうございます。

いいところ・悪いところが少しでもあつたら、感想に書いていただけると幸いです。というかとても書いてほしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4179k/>

---

# 木山先生

2010年10月11日20時19分発行